

昨夜、夢を見ました。

私が一匹の赤い金魚となり、貴方の書齋に飼われている夢です。

青い水草がゆらゆらと揺れている。その向こうに、奇妙にふくらんだ貴方が見えました。私の全身は光る鱗に覆われている。水を呼吸している。それなのに、私は貴方を夫だと思っているのです。原稿用紙に宿されていく文字を、嬉しく眺めたりしているのです。

「お茶でもいれましょうか」

貴方の筆が止まったのを見、思わず声をかけたのも自然なことでした。私にとっては、けれど、つめたい硝子越しに私の言葉は貴方の耳には届かない。唇から零れだした瞬間に泡となり、空しく消えていくばかりです。

貴方はそこにいるのが私だと気づいているのか、いないのか。

金魚鉢の中でぱくぱくと口を動かす私を、不思議な生き物のように見つめている。

もがくほど息は絡み、苦しさに身を躍らせ、気がつけば私は鉢から飛び出していました。なす術もなく落ちていく長い、長い時間。赤い魚である私は、自分が重大な過ちを犯したことに気づきました。貴方に、恋してしまった。こともあろうか、人間に恋してしまったと。

夢が破れると、隣には貴方がいました。

水の世界のようにしんとした、冷たい夜。障子から差し込む光をたよりに私は貴方の寝顔を眺めました。仔細に、なぞるように。月を映した顔は青白く、ぴくりとも動かず、私には測り知れぬ眠りの深みに沈んでいるようでした。

目が覚めてもなお、私には今の出来事が夢とは思いきれませんでした。傍にいて触れることもできるのに、二人が金魚鉢を隔てたように在ることを思い知らされた気がしたのです。

貴方の言葉は、美しい。麦わらを紡いで金糸となす、天賦の才を持っている。

でも、それは私を温めてくれる毛布にはならないことを、もっと早くに知るべきでした。

貴方の物語は万人のためにある。それなのにたったひと粒もらった言葉を、私は後生大事に、宝石のように抱いてしまった。石にぬくもりを奪われた胸は、いつか空ろになることに気づかずに。これが、私の求めた恋のなれの果てです。

それでも、私は貴方を守りたいと想う。傍に在りたいと想う。この眠りの門番であることが、私の使命であると想っているのです。

布団の脇へ押しやられていた毛布を、広げる。できるだけそっと。貴方が目を覚まさないように。やさしく空気をはらませ、貴方にかけてあげる。眠りの羽衣でつつみこむ。

そして、呟くのです。ゆっくりお眠りなさい、と。

とりとめのない手紙になりました。

どうか、硝子越しに金魚の吐く、独り言だと思ってゆるして下さい。

それでも、この空しく零れる泡粒が、いつか貴方に届く日を願いながら。